

干潟再生に関するリスクとベネフィットの環境コミュニケーション

山下博美（名古屋大学大学院環境学研究科）

近年、干潟の重要性についての理解の高まりや温暖化対策の一環として、又、魚貝類の資源確保等のために、国内でも英虞湾を始めとし、干潟や沿岸湿地の再生事業が数々行われてきている。海外では、1980年代以降、オランダ、イギリス、アメリカ等で、建設されていた潮止め堤防を取り除くなどした形での干潟再生事業が実践されてきた。

このような中、国内外において干潟再生事業に関する評価基準や、意思決定の指標の整理が求められているが、現在は、生物の個体数や潮の流れの変化など、自然科学的・定量的なデータに基づく評価がほとんどである。再生事業案が持ち上がった際、付近に住む住民や、農業や漁業を営んでいた人々など様々なステークホルダーが、その事業案に対してどのようなベネフィットとリスクを感じ取っていたか、また事業が行われた後、再生事業に対するそれぞれのディスコースはどのように変化していったか等、社会科学的・定質的なデータは、学術的に収集・分析が少ない。

本発表では、2011年4月から始まった科研研究の初期データより、諫早湾をケースに、特に再生事業や事業案について様々なステークホルダーに提供、又はステークホルダーから発信されている情報（紙媒体・映像・音声）とその初期分析の結果について報告する。